《研究ノート》

全国盲学校における「さわる絵本」の普及状況に関する調査

古屋祥子[*1]・大内　進[*2]

要　旨

本稿では、全国の視覚特別支援学校（以下、盲学校と記す）における「さわる絵本」全体と「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の所蔵実態と利活用の状況について、調査・報告するものである。質問紙調査では、施設毎に所蔵数・活用状況に偏りがあることや、様々にある「さわる絵本」の種類の中でも、ボランティア団体による手作りのものが多いことなどがわかった。これらの内容を基礎調査として活用し、触察を前提とした「さわる絵本」の制作における配慮事項を明らかにし、触覚教育や障害理解向上を目的とする制作プログラムの構築に繋げていく方向が示された。

キーワード：さわる絵本、触覚教育、視覚障害児教育

Ⅰ．はじめに　問題の所在

かつて視覚障害教育では、グラフィック情報の利用が極端に制限されていた。例えば、点字教科書は、通常の学校で用いられる検定済みの教科書を底本にして翻訳されたものであるが、挿絵、写真、イラストなどの視覚的なグラフィック情報の多くは削除されていた。極端に言えば、視覚的情報は、視覚障害、特に全盲の児童生徒には不要のものと思われていた。盲学校では、制約がありながらも視覚活用できる弱視児も通常の印刷物ではなく、点字教材を常用するという実態[i]が続いていた。

しかし、理解することが難しいから扱わなくても良いということではない。1960年代頃から可能な限り、視覚情報も触覚情報など他の感覚を用いて理解できるように努力するという流れに代わってきた。現在では、特別支援学校（視覚障害）小学部点字教科書の編集資料（令和６年４月）に「特に図、表、写真等の取扱いは、慎重に行い、点図化や文章化するなど、できる限り原典教科書に沿った点訳ができるように工夫すること。」という留意事項が認められるようになってきている[ii]。

絵本についても、1970年代に入って、視覚障害のある子どもも絵本を楽しむことができるようにと、素材の異なる布や木片、ボタンなどを使い、触って絵のイメージを掴めるように作られた手作りの絵本が登場し、ボランティアの努力により「さわる絵本」が制作されるようになってきた[iii]。

その後、商業出版として視覚に障害がある子どもも利用できる触察可能な絵本も刊行されるようになってきている。その作成方法も多様になってきており、盲学校の図書室にも所蔵されるようになった。しかしながら、これまで、全国の盲学校でこうした触察可能な絵本の所蔵実態やその活用状況などを体系的に調査した報告は認められない。

（所　属）
＊１山梨県立大学　＊２星美学園短期大学

Ⅱ．本調査の目的

本調査は、科学研究費による研究「触察教育のための『さわる絵本』の研究および制作プログラムの開発・実践」の一環として実施するものである。

「さわる絵本」の普及には目覚ましいものがあるが、触覚を活用した絵本鑑賞の効用については十分に検証されているとは言い難い状況にある。本研究では、触察を前提とした「さわる絵本」の制作における配慮事項を明らかにし、制作プログラムを提案することを目指している。そのことにより、「見える／見えない」に関わらず「さわる絵」を楽しみながら、絵本の世界を共有できる機会を増大するとともに、絵本を通して障害理解の向上を図っていくことに寄与できるものと捉えている。

この調査では、こうした本研究の目的を達成するための基礎資料を得るために、全国の視覚特別支援学校における「さわる絵本」全体と「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の所蔵実態と利活用の状況を明らかにしようとするものである。

Ⅲ．調査方法と用語の定義

１．調査対象

全国の盲学校64校を対象とした。

２．調査期間

2024年12月～ 2025年１月

３．調査方法

全国盲学校校長会を通して全国の盲学校長に調査を依頼し、google フォームを利用した Web アンケート調査の方式で回答を求めた。

４．回収率

全国の44の盲学校から回答があった。回収率は66％であった。

５．「さわる絵本」のタイプについて

「さわる絵本」は、広義にとらえると様々なタイプがある。回答に際して混乱を避けるために、本調査では、「さわる絵本」を以下のようなタイプに整理して示した。

（１）「さまざまな素材を使った」さわる絵本

布や紙、フェルトなどさまざまな触感の素材を使って触って楽しめる絵本。

（２）点字つきさわる絵本

商業出版物として市販されている点字付きユニバーサルデザイン絵本。多くは UV インクで点字や絵が凸印刷されている。

（３）点訳絵本

市販されている墨字（通常の印刷）の絵本に点字や触図の透明シートを張り付けたさわる絵本

（４）ユニリーフ

市販されている本について、透明なシートに点字や凸図を施し、それを見開き毎に挟み込んで製本しなおした絵本。なお、「ユニリーフ」は日本での通称であり、英国の「クリアヴィジョン」を範とするものである。

（５）点字プリンターで印刷された点字絵本

点字エディタと点図エディタ（EDEL）で点字と点図のデータを作成し、点字プリンターで印刷されたさわる絵本。

（6）テルミ

凸図で表現した形と点字をUV樹脂インク（かつては発泡インク）で印刷した定期的に刊行されている「手で見る学習絵本」。

（7）布の絵本

柔らかな感触の布を切り貼りして作成された絵本。台紙も布で、スナップやボタン、マジックテープ等で図柄が動かせるようにした仕掛け本もある。ボランティア等による手作りのものが多い。

（8）その他

上記の種類に属さないもの。

Ⅳ．調査結果

1．各種「さわる絵本」の所蔵実態について

各学校で所蔵している各種「さわる絵本」の種類と、おおよそのタイトル数、その利用状況について回答を求めた。

（1）「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の所蔵冊数

「さまざまな素材を使ったさわる絵本」については、50タイトル以下の学校が35校で全体の８割を超えていた。最も所蔵冊数が多かったのは251 ～ 300タイトルの範囲で、１校のみ抜きんでていた。

（2）「点字つきさわる絵本」の所蔵数

点字付きさわる絵本についても、50タイトル以下の学校が最も多かった。１校のみ551 ～ 600タイトルを所蔵しているという回答があった。

（3）点訳絵本の所蔵冊数

点訳絵本についても、50タイトル以下の学校が最も多かった。501タイトルを超える学校が２校あった。

（4）ユニリーフ（クリアービジョン）の所蔵冊数

ユニリーフについては、50タイトル以下の学校のみであった。普及が限定的であることがわかる。

（5）点字プリンターで印刷された点字絵本蔵書冊数

点字プリンターで印刷された点字絵本については、０という回答が16校からあった。１校のみ551 ～ 600タイトルを所蔵しており、学校によって対応が極端に異なっているさわる絵本のタイプだといえる。

（6）『テルミ』の所蔵冊数

『テルミ』は定期的に刊行される出版物であり、多くの学校で定期購読されている。所蔵冊数の差異は、定期購読の開始時期及び廃棄の実態が反映されていると思われる。

（7）「布の絵本」の所蔵冊数

「布の絵本」は主にボランティアが制作しており、供給数が限られていることから、所蔵していてもその冊数が少ない。未所蔵の学校も12校あった。

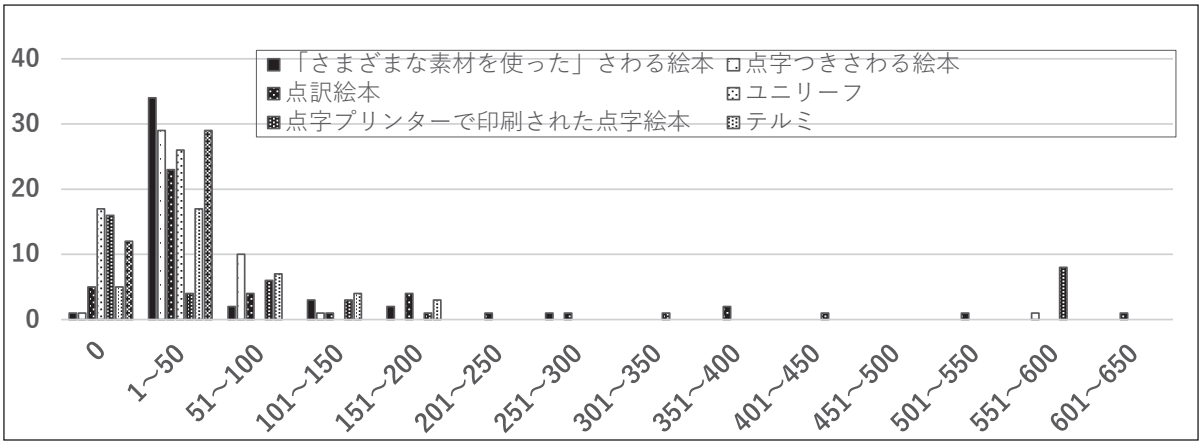


図１　各種「さわる絵本」の所蔵冊数

２.「さわる絵本」の利用状況について

（１）各種「さわる絵本」の年間総利用数（延べ数）

各学校における「さわる絵本」の年間利用数は、図２に示した。利用点数が40冊以下の学校が25校で回答校の半数を超えていた。100冊を超える学校は９校で、回答校の２割ほどにすぎなかった（図２）。

学校という組織をイメージすると利用状況が芳しくないように受け取れるが、この要因のひとつとして盲学校の少人数化が進んでいることを考慮する必要がある。令和６年度の盲学校校長会調査によると、全国の盲学校に在籍する児童生徒の総数は、2,129人で、そのうち幼稚部が157人、小学部が506人、中学部が383人であった[iv]。全校の幼児児童生徒数が10名ほどという学校も出現しており、義務教育段階では重複障害者の割合が50％を超えている。

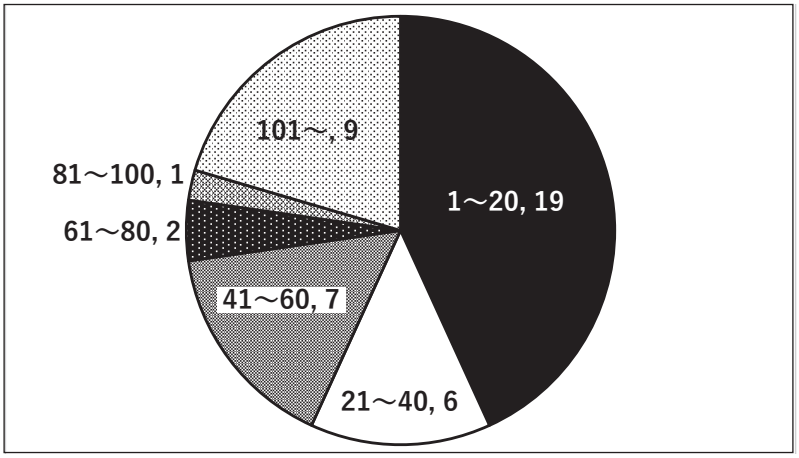


図２　各種「さわる絵本」の年間総利用数（延べ数）

（２）「さわる絵本」の利用や貸し出し形態

さわる絵本の利用や貸し出しについては、回答のあったほとんどの学校で図書室を利用していた。つまり、図書室の蔵書として管理し、幼児児童生徒の利用に供しているということである。図書室以外に教室への図書の長期貸し出しや保育や授業でも活用している学校がそれぞれ半数ほどあった（図３）。

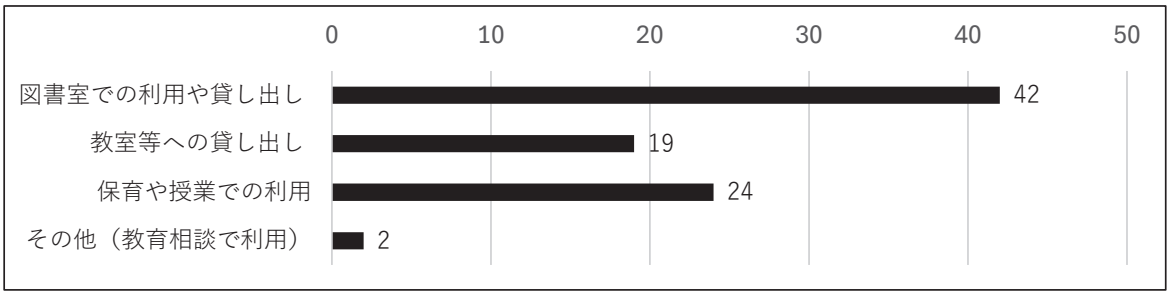


図３　「さわる絵本」の利用や貸し出し形態

（３）レオ・レオニ著作絵本の「さわる絵本」の所蔵について

「さわる絵本」は、視覚活用に制約がある子どものニーズに応えるだけでなく、見えている子どもと情報を共有するという役割も果たしている。そうした観点から、一般に人気があって評価の高い絵本の「さわる絵本」版を取り揃えているかを確認するために、具体的にレオ・レオニの絵本における「さわる絵本」への対応状況について回答を求めた。レオ・レオニ作品の「さわる絵本」版を所蔵している学校は４割弱で、６割強の学校では所蔵していなかった。

レオ・レオニの作品の「さわる絵本」を所蔵している学校に、具体的な所蔵作品名を尋ねたところ「スイミー」が最も多く、９校であった（図４）。教科書の教材として「スイミー」が掲載されていることによるものと推察される。

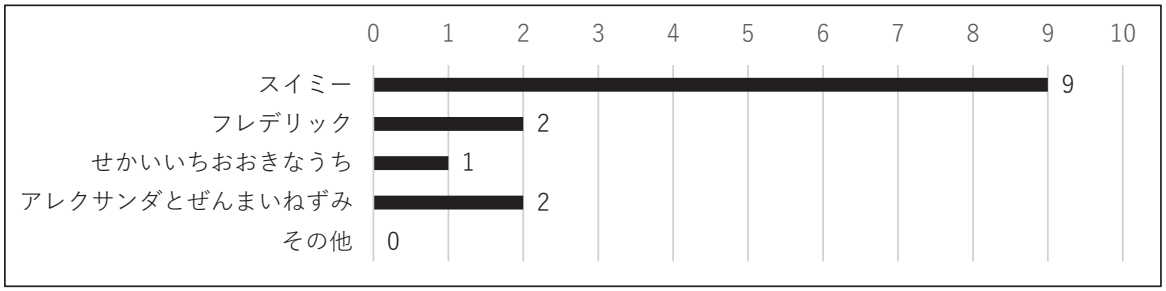


図４　レオ・レオニ著作絵本の「さわる絵本」の所蔵

３.「さまざまな素材を使ったさわる絵本」について

（１）「さまざまな素材を使ったさわる絵本 」の年間利用数（延べ数）

さまざまな素材を使ったさわる絵本についても、半数以上の学校で年間40点以下しか利用されていなかった。これも先述した幼児児童の少人数化が影響しているといえる。他方で101冊以上利用している学校５校あった（図５）。

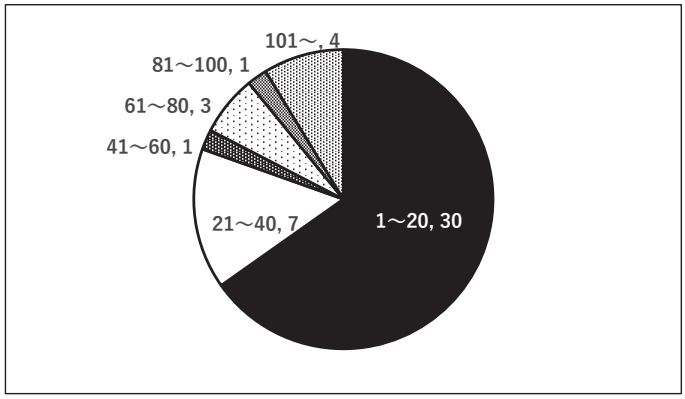


図５　「さまざまな素材を使ったさわる絵本 」年間利用数（延べ数）

（2）「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の製作者

日本の「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の製作は、ボランティアグループの取り組みからスタートしているが、現在でも37の学校ではボランティアによって製作されたものがメインになっていることが明らかになった。18校では、市販本の活用にも力を入れていた。少数ではあるが、教職員や児童生徒の手作りの本を所蔵している学校もあった（図６）。

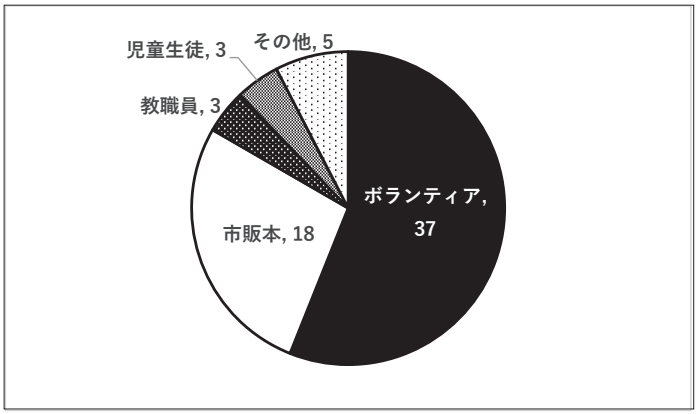


図６　「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の製作者

（3）「さまざまな素材を使った絵本」の内容

「さわる絵本」は、大きく一般の絵本を翻案したものとオリジナルな内容のものとに二分できる。「さまざまな素材を使った絵本」について、どちらのパターンが多いかたずねたところ、市販絵本を翻案したものが優位な学校が20校（45.5％）、オリジナルの内容のものが優位な学校は５校（11.4％）で、両者をバランスよく所蔵している学校が19校（43.2％）であった。

（4）「さまざまな素材を使った絵本」の有用性

「さまざまな素材を使った絵本」は子どもにとって有用かどうかを尋ねたところ、40校から肯定する回答があった。

有用であることの理由としては、「触ってイメージしやすい（36校）」、「直感的に把握しやすい（20校）」、「手指の操作がしやすい（４校）」、「リアリティが感じられる（12校）」などの回答があった。

有効でないという回答が４校からあったが、その理由については、「様々な素材を用いても絵の認

知は難しい（２校)」、「絵をさわるよりも点字文の読みに注力した方がよい（１校)」「間違ったイメージを与える（１校)」というものであった。

（５）「さまざまな素材を使った絵本」の製本について

「さまざまな素材を使った絵本」は１ページがかさ高くなるため、製本において堅牢性や操作性に配慮した工夫が必要となる。本の方法に関して自由記述で意見を求めたところ様々な回答があった。それらを整理したのが図７である。

簡易な方法としてさわる絵本では、リング製本によるものが多いが、堅牢性に課題があり、回答の３割弱はそのことを指摘していた。そのほか、製本に対する意見は多様であり、子どもがストレスなく読書を楽しむためには、製本の方法が大きな課題になっていることが示された。

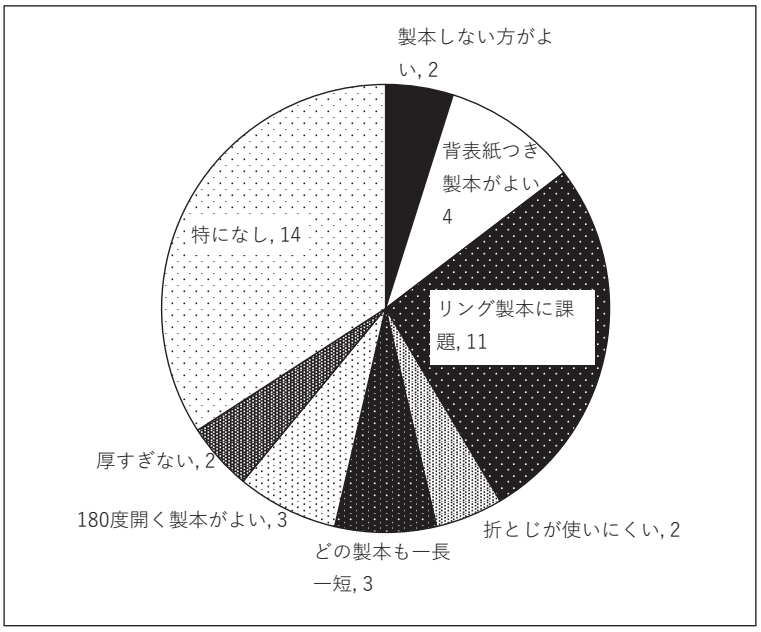


図７　「さまざまな素材を使った絵本」の製本について

（６）「さまざまな素材を使った絵本」の課題

「さまざまな素材を使った絵本」の改善に資するために、従前から課題となっている項目を示し、それに該当するものがあるか尋ねた。図８に示したように「蔵書数が少ない」ことが喫緊の課題になっていることが示された。触り心地や触認知のしやすさ、堅牢さへの配慮、ボランティアの増大を求める声も認められた。また、様々な素材を使った絵本の供給については、全国的にボランティア頼みになっている傾向にあるが、そのことは学校現場では大きな課題としては受け止められていないことも示された。

これらの項目以外に、自由記述で課題点を記してもらったが、回答は多岐にわたっていた。それらの意見は表１に整理した。従前から指摘されている課題が多かったが、学校現場での切実な思いが反映された回答が多かった。

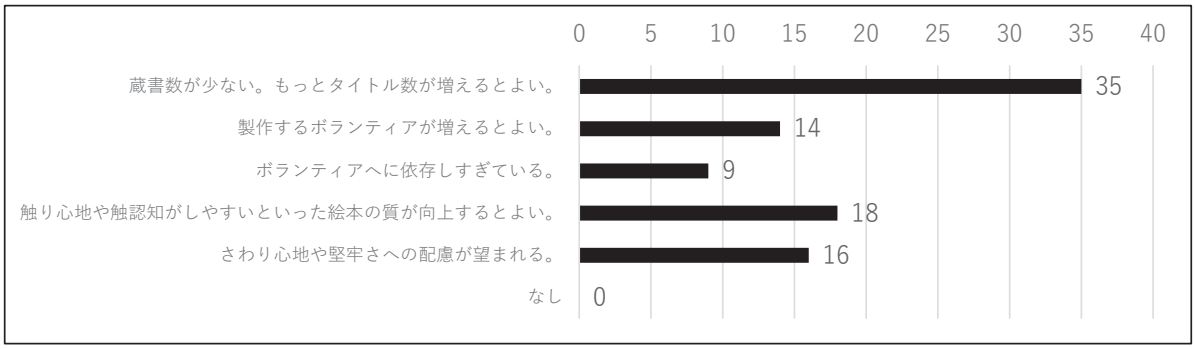


図８　「さまざまな素材を使った絵本」の課題

表１　「さまざまな素材を使った絵本」の課題について自由記述

表現方法について

・ストーリー性のある本の製作は難しい。

・既存のものの視覚的な表現を忠実に再現すると、視覚障がいのある子どもたちにとっては物の形をとらえるのが難しい。

・形への理解を考えるなら単純なオリジナルの絵になればいい。

（例）正面からの牛を横から見た牛に変更するなど。

・見える人の観点で作られている

堅牢性

・丈夫で壊れにくい素材で作ってもらえるとありがたい。

・人気がある絵本ほど傷むので継続的なメンテナンスが必要。文章が長いものは分かりやすく短くリライトしたLLブック化が必要。

・繊細な作りのものは壊れやすく修理が難しい。

ボランティアへの依存

・ボランティアに頼らなくてもよいように、市販の絵本の価格が下がり、学校の予算が増えるとよい。

・ボランティア団体に頼り切っており、配送まで負担させており、丁寧に扱いたいところだが、取り扱う教員によって、その篤志に対する思いは異なっている。捨てようとした非情な人間もいて残念に思っている。

保管の問題

かさばるため、図書室においておくスペースが足りない。

・布は保存の方法が難しく、清潔感が保ちづらい。

ユニバーサルデザインへの対応

・点字だけでなく、ＵＤフォントで拡大図書とすると弱視の子も自分で読むことができる。

認知度の向上

・普及や認知が増えるとよい。

（7）「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の普及について

課題点の指摘の中にも含まれていたが、「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の質的及び量的な改善を図っていくためには、その認知度を高め、広く理解してもらう必要がある。そこでその普及状況の現状認識について回答を求めた。普及しているという回答が1/4強、普及しているとは言い難いという回答が3/4弱であった。地域差もあるが、一層の普及活動が求められているといえる。

（8）「さまざまな素材を使った絵本」について意見や希望

自由記述で「さまざまな素材を使った絵本」について意見や希望を求めたところ、様々な回答があり、表２に整理した。

表２　「さまざまな素材を使った絵本」について意見や希望

実態に応じた対応

・既存の絵本を基に、取り外しができる、押すと音が鳴るといった児童生徒の実態に合わせた要望をボランティアさんに伝え、教材製作を依頼する取り組みをしている。実態に合わせて楽しめる本を相談しながら作っていただけるボランティアさんが増えてくださるとありがたい。

・お話を楽しむと同時に、触って楽しむ、イメージしながら読むことができるよう、さわる絵本がもっとたくさん、こどもたちのそばにある環境を作ることができるとよい。

情報の共有

・所蔵や製作団体についての情報提供が行き渡るとよい。

・教員でも短時間で簡単に作れる絵本の作り方などがあればぜひ知りたい。

・「触ってわかるか？」とよく聞かれるが絵本はもともと「おひざにだっこ」で読んでもらう、一緒に読むものであり、共通の読書体験を積むことでわかるようになると考える。

・絵本の選択とどのような作りにするかは作成者の専門性によるところが大きい。良い作品例などを各地域のボランティアで共有できるとよい。

・学校や公共の図書館など、どこにどんな「さまざまな素材を使った絵本」があるのか検索しやすくなると良い。

リアリティへの対応

・日本地図、世界地図など利用が多いので、必ず入手できるようにして欲しい。

・全盲の児童生徒がイメージが持ちやすいのは実物を触れることなので、実物に近い素材や大きさで作っていただけるとありがたい。

・触って劣化した際の廃棄のタイミングが難しい。

・児童生徒一人一人の特性に合わせて使用するものなので、図書室での長期保存にはあまり向かないと思う。

活用方法の工夫

・小さい子どもと晴眼者が一緒に楽しめるのは良いと思うが、やはりストーリーを理解する補助としては難しい部分がある。触る絵本単体より、読み聞かせで何を伝えたいのかを明確にして、実物を別に用意するなどの工夫をした方が効果的なことも多い。

・墨字絵本を触る絵本にするのではなく、明確な目的があり、触る絵本という形式が適しているからそのように作られた、という本があればいいなと思う。

・絵本の内容によっては、登場する人やものがページから独立していて自由に動かせるとわかりやすい。

Ⅴ．考察

１．各種「さわる絵本」の所蔵実態について

本調査では、「さわる絵本」を、①「さまざまな素材を使った」さわる絵本、②点字つきさわる絵本、③点訳絵本、④ユニリーフ、⑤点字プリンターで印刷された点字絵本、⑥テルミ、⑦布の絵本、⑧その他の８種類に分類して、その所蔵実態について回答を求めた。その結果から、各種「さわる絵本」については、その整備状況が学校毎で異なっており、所蔵数にばらつきが大きかったことが把握できた。学校の幼児児童生徒の少人数化、多様化の傾向が長年にわたって続いており、人口の多い地域とそうでない地域の学校規模の格差が大きくなっていることが反映しているといえる。しかしながら、盲学校は、全国で70校ほどしかなく、県に１校という自治体が多い。そうしたことから、盲学校は地域の視覚障害教育センターとしての機能も求められており、視覚障害に関連する教材教具等の充実も求められている。「さわる絵本」もそうした資源に含まれる。この観点から見ると、「さわる絵本」の質及び量の両側面において学校間格差が大きいという現状は大きな課題だといえる。学校単位での努力には限界があり、組織的な対応が必要だといえる。

また「さわる絵本」については、視覚活用に制約がある子どもの特性に配慮したものであることが何よりも求められることは論をまたないが、「共生社会」の実現という観点からは、視覚活用に制約のない子どもと情報が共有できる図書の充実に努める事への配慮も大切にする必要がある。「さわる絵本」の制作や供給についての配慮が十分とは言えないことも本調査から明らかになった。この点についても、今後組織的な対応が期待される。

２．「さまざまな素材を使ったさわる絵本」について

「さまざまな素材を使ったさわる絵本」についても、その供給や活用について、学校間での対応のばらつきの大きいことが、本調査から判明した。また、「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の利用数も限定的である学校が少なくないことも本調査から明らかになった。さらに幼児児童生徒数の少人数化という要因だけでなく、そもそも、それぞれの子どもに応じた絵本が少ないということも利用数が伸びない要因となっていることも考えられる。実地調査した盲学校において、長期間にわたって利用されていない形跡のある絵本が少なからず認められたが、本調査の結果と重なるものであることも考えられる。各盲学校で所蔵する「さまざまな素材を使ったさわる絵本」の多くは、本調査からも明らかになったが、ボランティアによって制作されたものが少なくない。ボランティアの努力に報いるためにも、学校の壁を越えて有効利用を模索していく必要があるといえる。一般図書館では、図書館間での相互貸借の仕組が整えられているが、「さまざまな素材を使ったさわる絵本」については、所蔵数の少ない盲学校が多いにもかかわらず、そうした取り組みは行われていない。

「さわる絵本」の内容については、大きく一般の絵本を翻案したものとオリジナルな内容のものとに二分できる。「さまざまな素材を使った絵本」について、本調査の結果では、市販絵本を翻案したものが優位な学校が20校、オリジナルの内容のものが優位な学校は４校、両者をバランスよく所蔵している学校が19校であった。視覚に障害がある子どもにとっては、どちらも有用である。バランスよく対応する学校が増えていくことが期待される。

本調査では、「さわる絵本」の制作における配慮事項等について深く探求しなかったが、アンケート調査だけからは把握できないことが多い。本研究の目的である「さわる絵本」制作プログラムを提案していくためには、本調査を踏まえた盲学校への個別訪問調査が必要であり、その実施を検討していきたい。

謝　辞

本調査は、全国盲学校長会からの全面的な支援によって実施されました。また、質問フォーム作成には攪上久子先生にご助言いただきました。ご協力に感謝申し上げます。

付　記

本研究は JSPS 科研費23Ｋ00217の助成を受け実施されました。

注

i　長岡英司　わが国における点字数学記号の変遷－整備のあゆみを振り返り今後を考える座談会－での発言．日本の点字，33，2009

ii　文部科学省「特別支援学校（視覚障害）小学部点字教科書の編集資料（令和６年４月）」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/mext_02663.html（2024年12月1日閲覧）

iii　攪上久子「草創期のバリアフリー絵本：その成立史と解題－」人間文化創成科学論叢　25，82-91，2023

iv　和田恒彦、安田咲登子　令和６年度の盲学校児童生徒数―平成18年度の人口動態、在籍児童生徒数との比較―筑波大学理療科教員養成施設紀要　10（1），2025

(Affiliation)

＊1 Yamanashi Prefectural University　＊2 Seibi Gakuen College Fellow

〈Research notes〉

Survey on the dissemination status of "tactile picture books" of the schools for the blind and visual imparied in Japan

Shoko Furuya＊1・Susumu Oochi＊2

Keywords：
Tactile picture books, tactile education, education for children with visually impainments

(Affiliation)
＊1 Yamanashi Prefectural University　＊2 Seibi Gakuen College Fellow